

Edmund Talbot の「痛ましい喜劇」における精神的成長

—William Golding の *Fire Down Below* の一分析*¹—

高本 孝子*²

Edmund Talbot's Moral Growth in his "Painful Comedy"

—An Analysis of William Golding's *Fire Down Below*—

Takako Takamoto*²

Edmund Talbot, protagonist of William Golding's trilogy, *Rites of Passage*, *Close Quarters* and *Fire Down Below*, is a young Englishman with an aristocratic background and a naive belief in the imperialistic Government and the hierarchical society of his own country. The trilogy describes Talbot's voyage to Australia, which enables his moral growth to a certain extent. His moral growth is evident in his newly-gained awareness that the value of a person has nothing to do with his /her social status. Moreover, in *Fire Down Below*, his friendship with Mr. Prettiman, social philosopher, awakens him to the evils of the hierarchy itself. But Talbot at the last moment refuses to throw off his social status. Just like Oliver in *The Pyramid*, he cannot overcome the self-preserving instinct. However, this failure does not accompany pessimism. On the contrary, a distinctive feature of *Fire Down Below* is humour. Talbot is seriously concerned about the deteriorating human relationships in the life-or-death situation. The humour consists in the gap between his serious attitude and the absurdity of the people's behaviours and the ridiculously happy turns of the main- and sub-plots. In this way, Golding tries to show life as tragedies and comedies twisted together.

水産大学校研究業績 第1391号、1992年1月13日受付.

Contribution from Shimonoseki University of Fisheries, No. 1391. Received Jan. 13, 1992.

* 1 1989年10月日本英文学会九州支部大会にて発表.

* 2 水産大学校 教養学科 外国語教室 (Laboratory of Foreign Languages, Division of General Education, Shimonoseki University of Fisheries).

Edmund Talbot のオーストラリアへの航海を描いた三部作の完結編である *Fire Down Below* は、第二部の *Close Quarters* と同じく小さなエピソードの積み重ねからなっており、第一部の *Rites of Passage* のように中心となる大きな事件は特に起こらない。また、『クロス・クォーターズ』に見られるような象徴性も『ファイヤー・ダウン・ピロウ』では姿を消している。Golding お得意の手法、すなわち、日常的な事物を出してきて、それにさまざまな意味を内包させることにより物語そのものを非日常化させていくというやり方もここには見られない。もっぱら、何度もしげに遭遇し、それらに果敢に立ち向かう乗組員たちと死の恐怖におびえる乗客たちの様子が描かれているため、この作品は一種の海洋冒険小説といった趣を呈している。確かに、この作品の一つのおもしろみは、主人公トルボットが精神的に成長していくと同時に「船乗り」としても成長していく過程を辿っていくことである。船についてははずぶの素人で、あちこちろつては船乗りたちからじゃま者扱いされていたトルボットが、長い航海の間に次第に船の経験を積み、ついには、本職の船乗りたちが荒れ狂う嵐の中で恐怖の余り舵を放って逃げてしまったときに、親友である Summers 中尉の手助けをして舵をとるというくだりなどは、でき過ぎの観はあるが痛快である。概して、全編にユーモアがみなぎっており、ゴールドディングの物にしては珍しく楽しい小説である。また、オーストラリアに到着の少し前に氷の壁に激突しそうになったと言うトルボットに対し(彼はおそらく南極大陸の一部に遭遇したと思われるが)、水文学の学者が、作り話としてはおもしろいがそんなことはありえない、もしそれが本当ならその氷の壁は大陸のように大きなものでなければならぬ、と言って彼の言うことを頭から信じないところなどは、現代人である我々には素人であるトルボットのほうが正しいことがすぐ分かるので、おもしろく読むことができる。

しかし、『ファイヤー・ダウン・ピロウ』はもちろんただの海洋冒険小説ではない。眼目は『航海の儀式』におけると同様、やはりトルボットの精神的成長を描くことにある。初めに断っておかなければならないが、『航海の儀式』においては、トルボットは上の階級に属する人間は人間としても上等なのだという前提にたって物事を考えていたが、『ファイヤー・ダウン・ピロウ』では初めからそのような考え方は姿を消している。彼はサマーズ中尉に対し、水夫上がりの成り上がり者という見下した見方をするのではなく、むしろ尊敬の念すら覚えるようになっている。また、水夫の Willis が彼に対して無礼なふるまいをしたときに

も、自分とウィリスの階級の違いを持ち出して彼をたしなめるのではなく、少なくとも年上の者には礼儀正しくふるまうようにと諭すだけである。さらに、すっかり湿ってしまった自分の服の代わりにサマーズから乾いた水夫服を与えられたトルボットは、他の乗客たちから水夫に間違えられても、そのことをおもしろがりさえする。彼は「衣装が社会の試金石だということがはっきりしつつある」とコメントしている。¹これらのことから明らかなように、『ファイヤー・ダウン・ピロウ』においては最初からトルボットは人間の価値が階級によって決まるのではないことをある程度認識している。もっとも、それは船の中の人々についてであって、社会の人間全体についてではない。ましてや階級制度の存在自体について疑問を抱いたり否定的な考えを持つまでには至っていない。次に挙げる Prettiman とのやりとりはそのことを明瞭に示している。

“And you, sir, travelling with the avowed intention of making trouble—of troubling this Antipodean society which is created wholly for its own betterment! It is a noble gesture which offers freedom and rehabilitation even to the criminal elements of our own society at home!”

“Do you know ‘our own society’?”

“I have lived in it!”

“School. University. A country house. Have you ever visited a city slum?”

“Good God, no!”

“The cottages on your father’s estates. Do the labourers sleep in beds?”

“They are accustomed to the ground. They are happy there. They would not know what to do with a bed stood on legs!”

“You know nothing.” (p. 203)

「そしてプレティマンさん、あなたはオーストラリアの社会が自らの地位を向上させるべくつくられたにもかかわらず、そこでいざこざを起こして迷惑をかけるという目的を公然と掲げて旅をしている！オーストラリアの建国は本国の我々自身の社会の犯罪分子にさえ自由と更生を与えようとする気高い態度だというのに！」

「君は『我々自身の社会』が何だか分かっているのかね」

「僕は今までその中で暮らしていたんですよ！」

「学校。大学。邸宅。君は都会のスラムに行ってみたことがあるかね。」

「とんでもない、ありませんよ！」

「君の父上の地所にある小屋はどうだ。労働者たちはベッドに寝ているか。」

「彼らは地面に慣れているんです。彼らはそこで満足しているんですよ。足のついたベッドなんかもらってもどうしていいか分からないでしょう。」

「君は何も分かっておらん」

ところで、サマーズは『航海の儀式』や『クローズ・クォーターズ』においてはトルボットのいわば精神的指導者の役割を果たしてきており、トルボットの精神的成長において欠かすことのできない存在であった。『ファイヤー・ダウン・ピロウ』においても、少なくとも初めの部分では彼は友情の行為によってトルボットを感動させる。たとえば彼は見張りに立つ士官の数が少ないからという理由をつけて、夜中の12時から午前4時までの見張りを自分と一緒にしてくれないかとトルボットに頼む。それは彼にとっては新たに仕事を増やすことでしかなかったが、彼はトルボットが Wheeler の自殺の痕跡が生々しく残っている船室で寝るのを怖がっているのを知っており、恩を着せることなく彼を船室から解放してやろうとしたのだった。サマーズと一緒に甲板に立って星空を眺めながら心を打ち明けあったトルボットは彼との深い友情を感じる。

しかし、『ファイヤー・ダウン・ピロウ』においては、サマーズは終始一貫してトルボットの指導者であり続けるわけではない。この作品では、指導者たるサマーズにもそれなりに限界があることが示される。それは同じく士官の Benét との対立において明らかにされてゆく。科学に強く、新しいやり方を次々ととりいれようとするベネットと、逆に科学には弱い船乗りとしての経験が豊富なサマーズは、船の運行のやり方について事ごとに意見が合わない。だが、ベネットを個人的に気に入っており常に彼のやり方に同意する船長は、しまいにはサマーズにベネットのじゃまをするなどまで言う。サマーズはすっかり意気消沈してしまい、トルボットの慰めも受けつけない。彼はベネットに対する嫉妬心を抑えることができず終始仏頂面をするようになる。

サマーズの限界はプレティマンとの対照においてよりはっきりと示される。前二作においてはほんの脇役に過ぎなかったプレティマンは、『ファイヤー・ダウン・ピロウ』においては、サマーズに代わってトルボットの精神的指導者になるという重要な役割を担っている。プレティマンは社会哲学者 (“social philosopher”) であり、移民たちの

尊敬を集めている。また、トルボットが一目置いている Miss Granham もプレティマンを愛するようになり、二人は婚約する。だが、人を表面だけで判断しているトルボットの目には、プレティマンはかんしゃくもちのこっけいな男としか映っていなかった。彼を形容するのにトルボットは “ridiculous” とか “comical” などの言葉を用いている。

“You find him comic?”

“Well. He cannot be entirely despicable or an estimable lady such as Miss Granham would not have consented to make him the happiest of men. But comic! He is wicked! Why — he is ill-disposed to the government of his own country, to the Crown, to our system of representation — in fact to everything which makes us the foremost country in the world.” (p. 8)

「君は彼を喜劇的だと思うのかい。」

「まあね。彼はまったく卑しむべき人間ということはないでしょうけどね。さもないとグラナムさんのような尊敬すべき女性が彼を一番幸せな男にしてあげようなどと思ったりはしなかったでしょうからね。でも喜劇的ですよ！彼は邪悪です！だって——彼は自分自身の国の政府や王位や代議制度に悪意を持っているんですから——実際彼は僕たちの国を世界で最も優れた国にするすべてのことに反対なんですよ。」

不運なことに彼は船が激しく揺れた際に寝台から落ち、そのために瀕死の重症を負う。腰の回りが大きくふくれ上がり、昼夜痛みにうめく彼の死期は近いと誰もが思った。死相の現れたプレティマンの顔に「喜劇的」などころはないとトルボットも思う。そんなある日トルボットはささいなことでベネットと言い争いになり、酒も入っていた彼は二人でプレティマンの船室に押し入り、彼の痛みを軽くしてやれるのはどちらかということで言い争いを続け、もみ合った拍子にプレティマンの足にどすと腰を下ろしてしまう。プレティマンは痛みの余り失神してしまう。グラナム嬢に、「あなたが彼を殺したのよ」と言われたトルボットはひどい罪悪感に悩まされるが、幸いに奇跡的にプレティマンはこの時のショックがもとで、逆に快方に向かう。お見舞いのために彼の船室を訪れたトルボットは彼が読んでいたギリシア語の本を見て、彼が教養の高い人物であることを初めて知る。そして彼を再々見舞っているうちに、トルボットは次第に彼の民主主義的理想に燃える

情熱に感化され、彼を尊敬するようにさえなる。それまでのトールボットは、先に挙げたプレティマンとのやりとりが示すように階級制度の是非について考えたこともなかった。プレティマン夫妻（作中グラナム嬢はプレティマンと結婚する）はトールボットを「見本」だとみなし自分たちの民主主義的理想を彼にどの程度にまで吹き込むことができるかを試そうとする。彼ら3人はあらゆることについて話し合う。そしてトールボットは急速にプレティマンの民主主義的情熱に感化されてゆく。

He was donnish; but there was nothing laughable about him unless it was his capacity for explosive anger. Beyond that his mind ranged vastly through the universe of space and time as it did through the other universe of books! And she, following his lead but not scrupling to differ from him and sometimes leading us where we had not thought to go! The Crown, the principle of hereditary honours, the dangers of democracy, Christianity, the family, war — indeed there were times when it seemed to me that I threw off my upbringing as a man might let armour drop around him and stand naked, defenceless, but free! (p. 209)

彼は確かに教師ぶったところがあったが、時々怒りを爆発させる気性を別にすれば彼にこっけいなところはなかった。それを越えれば、彼の心は本の宇宙を駆けめぐるように時空宇宙を広く駆けめぐったのである！そして彼女は彼の先導に従いつつも、彼と意見を異にすることもはばからず、そして時には僕たちが行こうと考えもつかなかったようなところに僕達を導いてくれたのである！王位、世襲の叙位の原則、民主主義の危険性、キリスト教、家族、戦争——実際僕は、人が鎧を脱ぎ捨てて、裸で無防備だが自由の身となるように、自分の教育を投げ捨てたように感じられたことが幾度もあった。

もっとも、難を言えば、このあたりはトールボットの精神的成長を軸として見た場合、物語の進行上かなり重要な箇所であるにもかかわらず1ページほどしか割かれておらず、彼の精神的脱皮の過程が読者にやや唐突の観を与えるのは否めない。このことは、『ファイヤー・ダウン・ピロウ』全体を通じて言えることだと思うのだが、ゴールディングの他の作品、特に階級制度を扱った *The Pyramid* などと比

べた場合、この作品においては階級制度批判というテーマを描こうという気迫があまり感じられず、時として作者の関心はトールボットの精神的成長というテーマから逸れがちであるように思われる。

ともあれ、プレティマンの民主主義的理想に感化されたトールボットは、個人のレベル以上には広がることのないサマーズの「単純な善良さ」を物足りなく思うようになる。サマーズは自由とか平等とか同胞愛とかいった抽象的な概念を理解することができなかったのである。一方サマーズは、トールボットの立場を考え、彼がプレティマンの思想にのめり込んでいくのを危なっかしく思っている。だが彼の心配は杞憂に終わる。プレティマンは、オーストラリアの奥地にエルドラドを探しに行く旅についてこないかとトールボットを誘うが、彼はそれに答えることができなかったのだ。

I said nothing. It was a silence that grew, lengthened until the very noise of the water hissing past our hull sounded like some wordless voice; and at last I knew that it did not need words and was something even closer to me than words themselves. It was the cold, plain awareness which we call common sense. (p. 219)

僕は何も言わなかった。沈黙は膨らみ、長引き、しまいには僕たちの船体をかすっていく水音そのものまでもが何か言葉にならない声のように聞こえてくるほどだった。そして遂に僕は分かった。それは言葉を必要としない、そして言葉そのものよりもずっと僕に密着しているものなのだ。それは、僕たちが常識と呼んでいる、鼻白ませるような明白な自覚だったのだ。

トールボットは、プレティマンと一緒にいるときには彼の情熱を分かち持つことができても、一人になるとその情熱を呼び戻すことはできない。『ピラミッド』において主人公の Oliver が Evvie に愛情を感じても彼女の階級には下りていくことができず、彼女の体をもてあそんだだけという結果に終わってしまったのと同様、トールボットも結局は自分の特権的地位を捨てることはできなかった。いみじくも彼は、オリヴァーと同じく「高すぎる代価」という表現を用いて、自分の保身本能を表している。

I wished with a spontaneous passion not unlike his that I might be their friend. Yet I saw already

that the price was impossibly high. I am after all a political animal with my spark, my — if I may descend to the language fit for sergeants — my *scintillans Dei*, well hidden. I suppose the excuse to be presented to the Absolute is that I did and do sincerely wish to exercise power for the betterment of my country: which of course, and fortunately in the case of England, is for the benefit of the world in general. Let that never be forgotten. (pp. 220-1)

彼の持つ情熱と同じくらい強くそしてひとりでに湧き上がってくる情熱的な気持で、僕は彼らの友達になれたらと願った。しかしすでに僕にはその代価が途方もなく高いことが分かっていた。結局のところ僕は自分なりの火花、あえて曹長にふさわしい言葉を用いるなら「神から授かった火花」を奥深く隠している政治的動物であるにすぎないのだ。(プレティマンの誘いを断わる)理由として僕が「絶対的存在者」に申し立てたいことは、僕が心から僕の国をよくするために力を尽くしたいと思っていることであり、言うまでもないがそうすることは、イギリスに限って言えば幸運なことに、とりもおさず世界全般の利益になることなのである。そのことは決して忘れてはならない。

トールボットもオリヴァーと同じく、認識はできても行動に移す勇気がないという自分の限界を知ったのである。だが、上の引用を見てもわかるように、トールボットの場合はオリヴァーの自己発見とは少し違い、挫折感があまり感じられない。したがって、『ピラミッド』に見られるような深刻味もこの小説にはない。トールボット自身、プレティマンの思想の正しさを理解しながらも、特権階級の身分を捨て切ることのできなかつた自分に対して楽観的に考えているし、むしろ「世の中に奉仕しなければならない」のだから自分はやはり行かなくてよかったと後年にも述懐している。(p. 313)

トールボットとオリヴァーのこの違いは一つには、オリヴァーの場合と異なり、プレティマンの誘いが、オーストラリアの奥地にエルドラドを探し出してそこに万民平等の国を建設しようという、現実味が乏しい空想的な計画への誘いだったということがあろう。また、同じ人称で書いてあってもトールボットの描写のほうがユーモラスに書いてあるということもあろう。たとえば、プレティマンと一緒に来るのか来ないのかと迫られたときのことを、まるで「片手に詩、もう片手に天文学を持った哲学者の追いはざり

(p. 220)に壁に押しつけられたようだったとトールボットが述懐しているくだりを読むと、我々は思わず噴き出してしまう。(この小説にはこのようなユーモラスな描写が多々見られるが、ユーモアが果たしている役割については、後で扱いたい。)

果たしてトールボットは、無事にオーストラリアに着いた後、名づけ親で後見者である祖父の死の知らせを受け取り、社会的身分という裏付けがなければ自分はただの無力な人間だという厳しい自覚を一時的に強えられるものの、その後、自分の知らない間に本国で国会議員に選出されていたことが分かり、また Miss Chumley と婚約も整うなど、万事めでたしめでたしとなる。

船の仲間を恋しがってプレティマン夫妻に会いに行ったトールボットに対し、プレティマン夫人は安全な元の世界に帰してやろうとして次のように言うが、このセリフは主人公に容易に価値観の拡大を許さないゴールディングのリアリスティックな創作態度を表すものであろう。

“.....The voyage has been a considerable part of your whole life, sir. Do not refine upon its nature. As I told you, it was not an Odyssey. It is no type, emblem, metaphor of the human condition. It is, or rather it *was*, what it was. A series of events.” (p. 275)

「……あの航海はあなたの全生涯のかなりの部分を占めるものでした。だからといってその性質を美化してはいけません。前にも言ったように、あの航海はオデュッセイではなかったのです。人間の状態の類型でも、典型でも、象徴でもありません。それは、それだけのものなのです。いえ、ものだったのです。一続きのできごとにすぎなかったのです。」

ところで、先ほどからこの作品にはふんだんにユーモアがちりばめられていることを何度か述べてきたが、ユーモアはこの作品においてはかなり重要な役割を果たしていると思われる。もっとも、三部作の第一作である『航海の儀式』においても、ユーモラスな表現はふんだんに用いられているのだが、この二つの作品を比べてみた場合、ユーモアの実践している役割は若干異なっているように思われる。よって、『航海の儀式』と対照させながら、この作品におけるユーモアの役割について考えてみたい。

まず、『航海の儀式』であるが、これはトールボットが名づけ親に「娯楽」として読ませるものとして書いたものと

いう体裁をとっているため、語り手である彼は常に読み手の名づけ親を意識し、滑稽に書こうとしている。彼が特におもしろおかしく描いてみせるのは Colley 牧師である。彼の人相、彼が船酔いに苦しむ嘔吐したものが自分の顔にかかるさま、Anderson 船長に突き飛ばされてはしご段を転がり落ちるさまなどの滑稽な描写は確かに読者を笑わせる。しかしながら、後にコリーが妹に宛てた手紙をトルボットと共に読む我々読者は同じ出来事をコリーの目を通して再体験し、コリーの内面の苦悩を知らされる。そして彼を表面からしか見ずに彼をあざ笑ったトルボットと一緒に安易に笑った我々読者も作者ゴールドディングの批判的な目にさらされていたことを知る。笑いというものは笑いの対象に対して笑う側が優越感を感じるときにままするものであるが、コリーの不幸をあざ笑ったトルボットと我々の笑いはまさにこれに相当し、いわば毒を持った笑いであると言えよう。このように、毒を含んだ笑いをを用いることにより、『航海の儀式』において作者は表面上喜劇的に見える人間の経験にも実は悲劇が潜んでいることを指摘して見せる。

一方、『ファイヤー・ダウン・ピロウ』においてはこれと逆のこと、すなわち、人間の経験の中で一見悲劇と見えるものの中にも喜劇が存在するということが示唆されると言える。『ファイヤー・ダウン・ピロウ』では、トルボットをはじめ船の人々は皆、生と死の境目という悲劇的な状態に置かれている。人々はお互いに対して体裁を取り繕う余裕をなくし、各々の人間性を剥き出しにする。このような状況はゴールドディングの処女作 *Lord of the Flies* に共通するものである。『蠅の王』において南海の孤島に漂着した少年たちは、ルールを作り社会生活を営もうとするが、次第に野性に返り、暴力や殺りくの興奮に酔いしれるようになってゆく。この作品でゴールドディングは人間の内部に潜む悪が極限状況において露呈していくさまをリアリティに描き出しており、全体の調子は暗く陰うつである。『ファイヤー・ダウン・ピロウ』においても、度重なるしけの中で常に死と隣り合わせにあり、また、食料も水も限られているというぎりぎりの生活を強いられている点『蠅の王』と同様であり、そのような極限的状况の中で、船に乗っている人々の人間関係も、たとえば夫婦関係の破綻など、深刻な状況に立ち至る。そして当事者である夫と妻はその事態を深刻に受けとめており、また、後で述べるように、『航海の儀式』のときは異なり部外者であるトルボットも同様に事態を深刻に考えている。

しかし、『蠅の王』とは異なり、これら深刻な事態は作者

が用いている滑稽なセリフ回しや滑稽なストーリー展開によりその深刻味が薄められてしまっている。たとえば Brocklebank 夫人と Pike 夫人は次第にそれぞれの夫を軽蔑するようになり、夫婦仲は冷えきってしまう。このような状況は当事者にとっては滑稽さとは無縁のものであるが、たとえばブロックルバンクのセリフの「彼女は僕のことを元気づけようとしてくれているが、実は彼女はすでに僕のことを未亡人の目で見ているんだ」というのには我々は思わず笑いを誘われる。また、ブロックルバンク夫人は死ぬときは抱き合って死のうと懇願する夫に対し、それは性に合わないといいながら、トルボットとならばおさかではないという素振りを見せる場面も滑稽である。『航海の儀式』を読んだ読者は安易に笑うことに対し警戒心を抱いて『ファイヤー・ダウン・ピロウ』を読みにかかるが、そういう意味では読者は肩すかしを食わされると言えよう。

このように、『航海の儀式』において同胞の不幸を笑いものにするという毒のある笑いが、『ファイヤー・ダウン・ピロウ』においては物事を楽天的にとらえようとする明るい笑いに変わってしまっているわけだが、笑いの質が変化するということそのからくりは一体どのようなものであろうか。まず第一に考えられるのは、語り手であるトルボットの周囲の人間とのかかわり方が二つの作品では異なっているということである。『航海の儀式』においてはトルボットは頻繁に「劇場」という比喩を持ち出しているが、これは船を劇場に見立て、自分は観客になったつもりなのである。そして我々読者は、階級意識に凝り固まり人間を表面からしか見ることのできないトルボットと同じ見方をするとしか許されず、彼が表面だけからの観察によってコリーの様子を滑稽に描けば、我々もトルボットと一緒にあって彼を笑いものにするのである。

しかし、『ファイヤー・ダウン・ピロウ』においては、トルボットはもはや観客ではなく、いわばステージの上の人物になっている。ここで注意しておかなければならないのは、『航海の儀式』が名づけ親という読者を意識して書かれたものであるのに対し、『ファイヤー・ダウン・ピロウ』は特定の誰かに見せることを目的としていない、ある意味ではほとんど日記と同じ性格のものであるということである。ところどころで「読者」という言葉が出てはくるものの、トルボットは最後に「これらの書物は僕たちが皆忘れ去られてしまうまで出版することはできない」とはっきり書いているし、また、自分の婚約者チャムリー嬢のことを「君たちのひいひいひいひいひいひいひいおばあさん」と呼んでいる

箇所もある。このように想定されている読者が異なっている以上、『ファイヤー・ダウン・ピロウ』が『航海の儀式』とは異なった書き方になるのは当然であろう。彼は殊更に周囲の人物を戯画化してみせようとはしていない。先ほども述べたように、船が沈むかどうかの瀬戸際なのであるから、そのような心の余裕がないのは当たり前ではあるが。彼の描き出す人間模様が滑稽に見えるとしても、それは意識的に滑稽に描かれたのではなく、むしろ大まじめに描かれたものなのである。この場合、我々読者は登場人物たちの言動に対しトルボットら当事者の視点、つまり種々の事件に直接かかわり、それらを深刻に受けとめる視点、それと同時にそれら同じ事件を距離を置いて客観的に見る視点、すなわち二重の視点を獲得する。このようにして、当事者にとっては悲劇でも、人間の経験は別の見方をすれば喜劇的でもあることを読者は知らされるのである。

要するに、ゴールディングはユーモアを用いることによって、人間の生の営みを悲劇と喜劇の両方の性質を合わせ持つものとしてリアルに描き出そうとしたのだということができよう。トルボットの次のセリフはゴールディングのそのような意図を明白に表している。²

Oh that voyage towards which I had looked as a simple adventure! What ramifications it had, what effects on the mind, the nature, what excitement, what sad learning, what casual tragedies and painful comedies in our rendering old hulk! (p. 212) (下線は筆者)

ああ、単なる冒険だと思っていたあの航海！ それは何という派生効果を持ち、精神と性質に何という影響を与え、何という興奮、何という悲しい教訓、そして何という気まぐれな悲劇そして痛ましい喜劇がこのたわむ古い船の中で繰り広げられたことか！

そして、さらにつけ加えるならば、『航海の儀式』が本質的には悲劇である反面、『ファイヤー・ダウン・ピロウ』は単にユーモラスな描写が多いからというだけでなく、ストーリーの展開の仕方からいっても喜劇であると言うことができよう。というのは、主人公トルボットや他の登場人物たちはほぼ全員が幸福な結末を迎えるからである。たとえば、プレティマンの回復をめぐるエピソードはその端的な一例である。トルボットが足の上のしかかったことで彼は一時意識を失い、船の誰もが彼の死を確信するが、実際にはこのことがきっかけで彼は快方に向かうのである。

コリーのストーリーとは対照的に、不幸な結末を迎えるかに見えた事件が一転ハッピーエンディングとなるのである。回復するのが恥ずかしいくらいだというプレティマンに対し、トルボットは「私たちの置かれた状況には一種の魔術があった喜劇がある」(p. 193)とコメントしている。

また、物語全体の結末を見ても、船は無事にオーストラリアに着き、トルボットは国会議員に就任し、チャムリー嬢と婚約するというハッピーエンディングになっている。自分が知らない間に国会議員に選出されていたり、偶然チャムリー嬢が乗っているアルシオン号がよりによってオーストラリアに到着するあたりなどは余にもうまくできすぎであり、トルボットも「僕の人生はファンタジー、『おとぎ話』、ばかばかしいほどの幸福の領域へ入っていった」(p. 283)と弁解がましく述べているが、確かにチャムリー嬢との再会以後の部分は、とにかく楽しく書かれており、作者自身が楽しみながら書いていることを想像させる。Stephen Medcalfはこの三部作をダンテの『神曲』にたとえているが、幸福な結末を迎えるという点においても『ファイヤー・ダウン・ピロウ』は『神曲』の完結編である天堂編と共通していると言えよう。³

注

- 1) William Golding, *Fire Down Below* (New York: Farrar Straus · Giroux, 1989), p. 31.
以下同書よりの引用はすべて頁番号を本文中に記載する。
- 2) 注意して読んでみると、この作品には“comedy”や“tragedy”などの言葉が頻出していることに気付く。たとえば、グラナム嬢のセリフ「トルボットさん、あなたは（プレティマンの重傷を）喜劇だと思っていました。これは悲劇なのです。あなたにとってではなく、世界にとって、私たちが近づきつつあり、そしてたどり着きたいと願っている新世界にとって」(p. 151)はその一例である。その他にも“high comedy”(p. 188), “a kind of magical comedy”(p. 193), “high drama”, “low comedy”(p. 258)などの言葉が出てくる。
- 3) Stephen Medcalf, “Into the southern seas,” *TLS*, 17-23 (March, 1989), p. 267.